

松下幸之助記念財団 研究助成
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】山田美季（やまだみき）

【所属】（助成決定時）東京芸術大学大学院 美術研究科

【研究題目】7-13 世紀における東アジアの邪鬼について

【研究の目的】（400字程度）

本研究は、四天王像の足元に配される邪鬼について、東アジア文化圏に属する中国・朝鮮半島・日本の邪鬼について、造形のパターンを分類し、その歴史的な変遷を跡づけるとともに、日本の邪鬼のもつ地域的な特徴を明らかにすることを目的とする。仏教美術において邪鬼はポピュラーな存在だが、美術史学において造形史学の視点から東アジアを含めた体系的、通史的に論じられた先行研究は多くなく、そこに本研究の意義を見出したい。これまでの研究において盲点とされてきた、邪鬼の造形に特化した基礎研究として重要な意味をもつと考える。

2010 年度提出の卒業論文以来、東アジアを含む通史的な観点からの検討をおこない、7-13 世紀における東アジア作例の形式分類と造形比較を通して、より客観的な視座の獲得を目指して研究を進めてきた。博士論文においては東アジアにおける地域や時代の変遷のなかで特に日本の邪鬼の全体像を捉えたい。助成金を得て行った研究は、その重要な一部を成すものである。

【研究の内容・方法】（800字程度）

本研究の方法は、邪鬼の造形パターン、上に乗る四天王像との関係性を指標としてA類「乗せる」B類「踏まれる」C類「支える」の3類に分類し、さらに台座型、踏鬼型、地天型、担鬼型、担鬼かつ踏鬼型からなる5型に細分化し、形式分類という方法によって造形変遷を明瞭化したところにある、この3類5型の分類に立脚して、東アジア文化圏のうち、とくに濃密な影響関係を形成する中国、朝鮮半島、日本の各地域で並行的に展開する邪鬼の造形を客観的に捉え、東アジア文化圏を貫流する造形伝播の様相とその間にあらわされる地域ごとの特性の両面を顧慮しながら、7から13世紀に至る邪鬼の造形史を論じる。

本研究は、邪鬼の写真、法量（サイズ）、形状の確認などを収集したデータベースの構築と、それに基づく作品研究の二つを基軸としている。

2013年10月1日から2014年3月31日までに行った研究の中から、まずデータベース構築のうち朝鮮半島の邪鬼のデータ収集について、ここに報告する。韓国での調査は2014年3月16日から3月25日かけて行った（準備期間は2013年10月より）。

調査対象は、①韓国国立中央博物館所蔵・感恩寺東三層塔出土舍利容器、②韓国国立中央博物館所蔵・石塔部材、③慶州国立博物館所蔵・感恩寺西三層塔出土舍利容器、④遠願寺址東西三層塔石塔、⑤慶北大学博物館石塔である。また、この調査期間に、軍威、断石山、檀國大学にて関連作例について調査熟覧をおこなった。



④遠願寺址東西三層石塔



⑤慶北大学博物館石塔（調査風景）



参考) 檀國大学調査



軍威石窟 熟覧・撮影

いずれも 7 - 10 世紀を代表する四天王像に付随する邪鬼であり、特に①③については年代のわかる基準作例として重要な国宝である。今回の調査では多くの先生方のご協力により、大変貴重な機会を頂いた。

作品研究では、日本において 7 世紀後半の国家規模での作例として注目すべき奈良県西大寺四王堂四天王像邪鬼について研究を進めた。本作は、官営工房により国家規模で制作された作品として重要だが、邪鬼以外の部分は後世の補作とされ、これまで造形に注目されることはあまりなかった。しかし当初の邪鬼が残るという点で邪鬼研究においては興味深く、研究を進めるに至った。文献資料からの考察、データベースを用いた周辺作例との比較、作品の熟覧・調査、によって検討をおこなう。調査については目視での熟覧段階にとどまり、助成期間中は調査計画にとどまったが、研究内容については学内の授業にて発表する機会を設け、中間的な報告をおこなった。今後、投稿論文への掲載に向けて、これまでの成果を土台とし、公表に向けて研究を進めたい。

【結論・考察】(400字程度)

データベースの構築では、研究代表 朴亨國「韓国の浮彫形態の仏教集合尊像(四仏・五大明王・四天王・八部衆)に関する総合調査」平成 20 年(2008)3 月の p402-403 に掲載された韓国四天王像の基準作例を参考に、邪鬼の基礎データが不足していた上記の作例の調査を試みた。日本との関係性の深い朝鮮半島の基準作例を熟覧・撮影できたことは、邪鬼の編年表を作成する上で重要な調査となった。とくに細部(髪型の毛筋の彫りや、手足の動きなど)については、図版での見解と異なる点もあり、自身で作成しているデータベースの更新をおこなう結果となった。

作品研究における西大寺四王堂四天王像邪鬼の問題については、学内の中間報告において諸先生方のご指摘を受け、考察を深めている段階である。調査に向けてより焦点を具体化していきたい。本作は邪鬼の拳に孔が空いており、持物が収まっていたと考えられる。実査により状態を確認し、文献と照らし合わせて検討を進めたい。